

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題	『まぬけのウィルソン』とその時代——「1853年選挙」の風景——
著者	上西哲雄
出典	アメリカ研究, , No. 48, pp. 21-38
発行日	2014, 3

『まぬけのウィルソン』とその時代

——「1853年選挙」の風景——

上 西 哲 雄

はじめに

アメリカ文学と選挙と言って誰でも思い出す作品のひとつは、1894年発表のマーク・トウェイン作『まぬけのウィルソン』(*Pudd'nhead Wilson*)ではないか。選挙の本質を衝く疑問が提起されている。この作品は、「まぬけのウィルソン」(*"Pudd'nhead Wilson"*)と「かの異形の双生児」(*"Those Extraordinary Twins"*)という、登場人物や舞台が同一で物語も基本的に重なる二つの物語から構成されている。その後者の物語において、シャム双生児の兄弟がそれぞれ異なった政党から選挙に立候補して、ひとりが当選しもうひとりが落選したら、議場にはどのように登庁すれば良いのかという疑問が問われている。ひとつの身体にふたつの人格——選挙でひとりの人を選ぶということの様々な問題の核心が、ここにはある。

物語は本来、ドーソン・ランディング(*Dawson's Landing*)というアメリカ西部の町にやってきたイタリア人のシャム双生児の兄弟ルイージとアンジェロを巡る喜劇であったのが、書き込むうちに脇役であったはずの東部から来た若き弁護士デイヴィッド・ウィルソン(通称「まぬけのウィルソン」)や黒人奴隷ロクサーナ、その息子でロクサーナに主人の息子と取り換えられるトムの物語がどんどん膨らみ、独立した悲劇として発展してしまう。そこで作者は、先に構想したシャム双生児の喜劇を抜き出して「かの異形の双生児」としてまとめ、後から膨らんできた悲劇の方は、双生児を身体的には切り離して比較的平凡な双子にした上で脇役に下げ、ウィルソン、ロクサーナ、トムの物語を発展させて、「まぬけのウィルソン」という悲劇として完成させたのである。選挙についてはいずれも、ドーソン・ランディングの町が市に昇格するのに伴って市長選挙と市議会議員選挙が行われ、ウィルソンが市長にイタリア人兄弟が市議会議員に立候補す

るということになっているのだが、イタリア人兄弟の立候補を巡って、二つの物語は大きく違う。

「かの異形の双生児」の物語の核心のひとつは、双生児の二人が身体的に結合しているにも関わらず性格も思想信条もまったく異なるということである。二人は共に町で人気を獲得するが、人々はH頃から好みに従ってルイーザ派とアンジェロ派に分かれていた。選挙になるとそれがそっくりそのままそれぞれの選挙陣営となり民主党と共和党に分かれて選挙戦を展開し、最終的にはルイーザが当選しアンジェロは落選する。問題は二人がシャム双生児であるために、当選した者しか議場に登庁することができず、落選したアンジェロを縛り首にすることで決着するというのが物語のオチとなっている。これを喜劇と呼ぶかどうかはともかく、人を選ぶという選挙にまつわるアイデンティティの問題を根本的に問いかけている。

これに対して「まぬけのウィルソン」では、ルイーザとアンジェロの性格は互いに異なるものの、「かの異形の双生児」で問題になるほど大きな違いはなく、二人は共に民主党から立候補して共に落選し、失意の中で町を去る。町に来た当初は「かの異形の双生児」の場合と同じく人々の人気を集め、選挙には請われて立候補したにもかかわらず、いくつかの事情が重なって誹謗中傷的となり、あえなく落選するのである。このエピソードの流れの中に、「かの異形の双生児」に見られるような選挙の本質を衝く問題提起は盛り込まれていない。選挙の話題は、ウィルソン、ロクサーナ、トムを巡る物語の陰に大きく後退し、一読しただけでは物語に大きな意味があるようには思えない。

同じ登場人物、同じ舞台で二通りの物語を作り、それを共に残してひとつの作品にしたのは、執筆当時の作者トウェインに事情があったとも推測されている。トウェインは1891年暮れに科学雑誌 *Scientific American* の記事を読んでシャム双生児に関心を持ち「かの異形の双生児」を書き上げたものの、1892年に出たフランシス・ガルトン (Sir Francis Galton) の『指紋』(*Finger Prints*) を読んで、「まぬけのウィルソン」へと構想が膨らんでいったというものである (Emerson 193)。舞台のドーソン・ランディングも、『トム・ソーヤーの冒険』(1876) や『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885) の舞台と同じくトウェインの故郷の町ミズーリ州ハンニバル (Hannibal) をモデルとしているとされており、当時経済的に逼迫していたトウェインが売れる本を早く書くために、手馴れた舞台の枠組に、当時評判になっていた手近なネタを寄せ集めて仕上げた面が強い。

一方で「まぬけのウィルソン」は「かの異形の双生児」と、ある微細なしかし決定的な点で物語の作りが大きく異なり、物語の表面では大きな役割を果たさない選挙に、ある意味では「かの異形の双生児」より遥かに大きな意味が与えられている。「かの異形の双生児」で物語に時の指定が一切記述されないのに対して、「まぬけのウィルソン」は時代設定を年まで特定している。まず、最初の3章で、物語の前提となる事件が1830年の出来事として説明される。同年2月に舞台となる町ドーソン・ランディングの有力な一族ドリスコル家に嫡男が誕生すると同時に、その家族が所有する黒人奴隷女ロクサーナに男の子が生まれる。その年の9月に、ロクサーナが奴隷に生まれた息子の将来をはかなんで主人の息子と取り替えてしまうことから、物語は動き出す。4章に入って1845年の秋に飛ぶ。トムの本来の主人であり今は父となっているパーシー・ドリスコルが死に、トムはパーシーの兄ヨーク・レスター・ドリスコルに引き取られる。トムの実の母ロクサーナはパーシーの遺言で奴隷から解放され、蒸気船のメイドになる。さらに8年経った1853年であることが明示されて5章が始まり、この後最後の21章まで1853年が舞台となる。選挙は、物語がイタリア人双生児兄弟の登場、決闘、殺人事件、裁判と劇的な展開を見せる中で、この1853年にドーソン・ランディングの市への昇格に伴う市長選挙と市議員選挙が行われるという形で、盛り込まれている。

様々なアイデアを継ぎ足し膨らませて「かの異形の双生児」から「まぬけのウィルソン」を生み出したのだとしても、後者を構想する中でなぜ新たに年をこうまで特定しなければならないのか。そうすることで何が見えてくるのか。本稿が解明したい基本的な疑問はこのことである。加えて、なぜ「かの異形の双生児」を捨ててしまわずに、「まぬけのウィルソン」の後に、成立の経緯まで盛り込んで付け加える形をとったのか。そこにはトウェインのどのような意図を読むことができるかを、併せて考察しようとするものである。¹⁾

1 1853年選挙の争点

ミズーリ州に限らず、アメリカ合衆国にとって1853年という年号で思い出されるのは、翌年成立して発効するカンザス・ネブラスカ法の提案ではないだろうか。経緯は次のようなことだ。そもそもフランスから購入したミシシッピ沿岸のルイジアナ準州の中で、1820年にミズーリが奴隷州としてアメリカ合衆国への加盟を申請した際に、ルイジアナの中では北緯36度

30分を境に北は自由州、南は奴隷州とした上で、北側に属するミズーリ州は例外的に奴隷州として加盟が許された。いわゆるミズーリ協定と呼ばれるこの取り決めに無効にし、州のことは州民が決めると定めたのが1854年のカンザス・ネブラスカ法である。

ミズーリの真西に位置するカンザスとその真北に位置するネブラスカが州となるのか、それも奴隷州になるのか自由州になるのか。奴隷制を前提として日常生活を営むミズーリ州の州民にとって、カンザス、ネブラスカ両州が自由州になった場合の影響は計り知れない。現実の世界では、選挙においてカンザス州には、奴隷制に反対する東部の勢力が送り出した移民団が入る一方、それに対抗するべくミズーリ州の奴隷制支持者が多数カンザス州に入り、流血の騒ぎとなった。物語のようにミズーリ州の中で地方選挙が1853年にあったとすれば、この問題を巡ってどちらを支持するのが争点となるのは間違いない。「1853年選挙」は、読者に歴史のifが立ち上げる風景を想起させる設定である。

「まぬけのウィルソン」では、最初に構想した「かの異形の双生児」には盛り込まなかった、白人と黒人奴隷の子どもが取り替えられることによる悲劇の物語を中心に置いている。その中では、家族が引き裂かれ、黒人奴隷の間では地獄と恐れられる深南部に売り飛ばされることに対する恐怖が繰り返し言及され、また実際に行われる。その上で物語は時代に開いた1853年の選挙という窓を用意して、こうした悲劇の源である奴隷制度を巡る激しい論争と流血を伴う物理的な衝突というカンザス・ネブラスカ法にまつわる当時の風景を、窓の向うに想起させる。そうした歴史的に大きく広がる激しい争いの下で、物語のような個別具体的な個人による事件が無数に展開していたであろうことを、読者の目の前に展開させてみせている。

それにしてもなぜ、南北戦争終結後四半世紀が過ぎた1890年代になっても、奴隷制度の悲劇を語り続けるのだろうか。しばしば指摘されるのは、マーク・トウェインが奴隷制度に対して「原罪意識」(Powers 36)のようなものを抱えているということである。トウェインの一家は、もともと奴隷を6人保有していたものの経済的な理由から次々と売り、ハンニバルに移住して後、最後のひとりとなった奴隷女も家計の逼迫から売ったとされている。しかも、南北戦争時にトウェインは、わずか二週間ではあるが、奴隷制度を肯定する南軍側の義勇軍に参加した経験もある。そんな彼が、東部に移ってからは奴隷制度反対運動の重要な支援者の女婿となり、反対運動の指導的立場にあった知識人達に囲まれて執筆活動を続けてきたので

ある。抑圧しつつ拭いきれない自らの南部人としてのアイデンティティへの罪の意識が、『トム・ソーヤーの冒険』、『ハックルベリー・フィンの冒険』、そして『まぬけのウィルソン』と、中期を彩る主要な長編小説のいずれにおいても南北戦争前の奴隷制度下の南部を舞台にすること自体に、表出していることは否定できない。

しかし、だからと言って、1890年代にもなって奴隷制度を巡る原罪なのだろうか。言うまでも無く、南北戦争終結から30年近く、「南部再建」から20年余りたったとは言え奴隷制度を巡る原罪意識から逃れられないのは、アメリカ南部文化に根ざした奴隷制度の根の深さ、トウェインの生い立ちを考えると、むしろ当然と言えるのかもしれない。しかし、それにしてもなぜこれまでの『トム・ソーヤー』や『ハックルベリー・フィン』とは違って、『まぬけのウィルソン』は、これほどまでに暗い結末の小説なのか。罪の意識があるとすれば、一層深まっているようにも見える。

執筆の事情を巡って『トム・ソーヤー』や『ハックルベリー・フィン』と『まぬけのウィルソン』の決定的な違いは、トウェイン一家の家計の状態ではないか。トウェインは1880年代半ば頃に知った新型印刷機の発明への投資や出版社の経営などに手を出し、多額の負債を抱えてしまう。行き詰ったトウェインは借金返済の資金稼ぎのために、1893年、ヨーロッパに長い講演旅行に旅立つことになる。『まぬけのウィルソン』の執筆はこの直前の1891年から1892年にかけてのことである。経済的な行き詰まりが、この作品の執筆に暗い影を落としていると考えるのは不自然ではない。そうであるなら、テキストに嵌め込まれた選挙という窓から、何か経済的な状況の展開を眺めることはできないのか。1853年にドーソン・ランディングで行われた選挙における争点が、先に見たようにカンザス・ネブラスカ法を巡るものであったとしても、経済的な事柄は争点とならなかったのか。

再び1853年当時の政治状況を振り返った時、カンザスとネブラスカを州に昇格させるという構想は本来、ミズーリ州の西側の両地域を州として整備することで、大陸横断鉄道を誘致することを目指すものであったことが思い出される。カンザス・ネブラスカ法はミズーリ協定の縛りを両州から外して奴隷州にすることを可能にすることで、大陸横断鉄道のルートを南部に望んでいた南部諸州を懐柔し、より北にルートを取ることに同意を取りつける狙いがあったとされている。「まぬけのウィルソン」におけるドーソン・ランディングの市制施行に伴う市長および市議会議員選挙を1853年にする設定には、物語の背景に想定される選挙戦のテーマが奴隷制度であ

るようにしつらえる狙いもあったであろうが、加えて鉄道敷設を巡る論争、つまりは経済的な思惑がこの選挙の背後にあることを想起させる意図もあったのではないか。では、町を取り巻く経済状況や思惑とはどのようなものなのか。経済的な観点から、ドーソン・ランディングの描写とハンニバルの歴史をここで検証しておこう。

2 1830年の町と経済発展

「まぬけのウィルソン」における年号のつけ方と言えば、物語の冒頭で、物語が1830年に始められていることを見逃すわけにはいかない。この時のドーソン・ランディングの様子は、メイン・ストリートが一本しかないものの、そこは「6ブロックから成っていて、各ブロックには煉瓦造りの3階建ての店が2、3軒ずつ立ち、その間に木造の小さな店が挟みこまれていた」(3)となっている。

1830年と言えばトウェインが生まれる5年前、トウェインの一家がこの地に移り住む9年前のことである。当時ハンニバルは、人口はわずか30人であったとされていて、ドーソン・ランディングのメイン・ストリートの描写とは不釣り合いだ。物語では、この時点で町は「誕生から50年」(4)とされていて、おおそ独立戦争の頃に人が住み始めたようになっているが、ハンニバルはそうではない。この地域に先住民族やスペイン人が居を構えることはそれ以前からもあったとされるが、現在のハンニバルの源となる入植は1819年、すなわちミズーリが州として認められる1821年のわずか2年前のことに過ぎない。物語の町を形容する「静かで、こじんまりと、充足した」(4)との表現は、立派なメイン・ストリートのある物語のドーソン・ランディングより、1830年の現実のハンニバルの方がより相応しい。しかしその後のハンニバルは「静か」でもないし、「充足」もしていない。ミズーリ州から町として認められたのが1838年、市への昇格は物語より8年早い1845年。人口は1850年の国勢調査で2,020人、1860年には6,500人に達し、この時点でミズーリ州の中ではセント・ルイス、セント・ジョセフに次ぐ3番目に人口の多い都市となったとされている。ドーソン・ランディングに比べて現実のハンニバルは、遥かに急速な成長を遂げている。²⁾

ミズーリ州の発展は、ハンニバルの町の礎となる入植とほぼ同じ1817年に、ミシシッピ河に蒸気船が就航するようになることで本格化する。ミシシッピ河沿岸で最大の港ニューオーリンズにドックを持つ蒸気船は1832年で532隻であったのが、ハンニバルが市制施行を迎える1845年には2,000隻を

越え翌年には3,000隻を越えたとされている。ドーソン・ランディング同様、ハンニバルはミシシッピ河の航路の発達と共に発展して輸送の経路が確保され、養豚業や小麦栽培といった農業・牧畜業が後背地に発達した。しかし後背地ということ言えば、ドーソン・ランディングの周辺の農業地帯とは違ってハンニバルの後背地に当たるマリオン・カウンティは、1826年にカウンティとなって行政が整備された後、食品食肉加工、煙草製造およびそれらの包装や包装材製造といったことを中心とする、ミズーリ州を代表する工業地帯のひとつとなった。その後のハンニバルは、ミズーリ州の中でも経済成長の著しい地域を後背地に持つ主要な都市のひとつにあって言う間に成長したのであって、ドーソン・ランディングのように「ゆるやかに、確かにゆるやかにではあるが、成長はしている」(4)のとは違う。

では、問題の1853年時点でのハンニバルはどうだろうか。ドーソン・ランディングの1853年は「町はこれまでずっと眠りこけていたのだが、いまや、うたた寝する間もないほど」(79)になると言うのだが、それはイタリア人の双子の登場や決闘といった個人のスキャンダルに属する事件が起きたことを指すに過ぎない。一方、現実の世界におけるこの時期のハンニバルで注目しなければいけないのは、鉄道の建設である。アメリカ合衆国で初めて公共交通機関として蒸気機関車が走ったのは1827年、ミズーリ州は約10年後の1836年の州議会で建設促進を決定する。1837年の全国的な大恐慌とその後の長い不況で建設計画は立ち消えになったものの、景気が上向き始めた1847年に再度州議会が州による支援を伴う鉄道建設を決める。具体的には、州の西側のカンザスと接する位置にあるセント・ジョセフと、州の東を流れるミシシッピ河畔に位置するハンニバルを結ぶ経路が選ばれる。財政的に余裕の無いミズーリ州は十分な資金の投入ができず、実際の工事の開始は1853年、完成は1859年と、建設決定から20年以上もかかっている。とは言え、1853年は現実のハンニバルにとって、州内最初のしかも自らを起点とする鉄道の、待ちに待った建設が開始される年に当たるのである。³⁾

1853年と言えば、カンザス・ネブラスカ法が提案され大議論が巻き起こっている時であり、大陸横断鉄道をどのルートで敷くかということが問題の発端にあったことは、先に触れた通りである。全国的な視野から見た場合、1847年にカリフォルニアが合衆国に併合され(1850年に州として合衆国に加入)、1849年のゴールド・ラッシュでカリフォルニアの人口はあっとい

う間に急増。ミシシッピ河からカリフォルニアに鉄道を敷設すれば大規模な利用が見込めるだけに、地域の利権がからんでどのルートで最初の鉄道を敷設するのかが大きな問題となった。ミズーリ州ではセント・ルイスを起点として州内を西に進む路線が好ましいとして、州議会がハンニバル＝セント・ジョセフ鉄道に加えて、その南側を並行して走ることになるセント・ルイスとジェファーソン・シティを結ぶパシフィック鉄道の建設を1849年に決定し（1860年開通）、大陸横断鉄道が州内の鉄道につながることを期待する。結局、最初の大陸横断鉄道は、ミシシッピ河沿岸にあるネブラスカ州最大の都市オマハを起点にネブラスカ州内を通してワイオミングに抜けてしまうルートとなり、ミズーリ州を通ることは無かったが、1853年に選挙があれば、大陸横断鉄道の路線問題も話題の中心のひとつとなったことは間違いない。

1853年の段階になっても、町の中のスキャンダルを除いて静かに眠るドーソン・ランディングの町だが、以上のような状況を見ると、行われる選挙の背後で、鉄道を巡る様々な問題を含む経済的な論争が繰り広げられていることを想像するのは、十分に可能である。では、このような経済的な状況に、奴隷制度を巡る「原罪」意識と同じようにトウェインの中で彼を抑圧する、いわば「もうひとつの原罪」とでも呼ぶべきものを求めることは可能だろうか。

儲け話に手を出してしまうこと、その結果、次第に経済的苦境に陥ってしまうことについて、トウェイン自身、業のようなものを感じていたことは指摘されるところである。奴隷制度をトウェインの「原罪」と喝破したパワーズは、トウェインにとりついて離れない大儲けの思惑を「富の呪い (curse of it [rich])」とし、土地投機や事業への投資に固執し続けた父親によってもたらされた、経済的に極めて不安定な幼少期の生活がその根源にはあるように論を立てている (Powers 38)。「富の呪い」——富に魅せられそのために破滅に陥る運命とでも解釈できるだろうか。

トウェインの父ジョン・マーシャルは、1798年にヴァージニアで生まれ、若い頃から弁護士事務所で修行して1822年に弁護士の資格を獲得するという努力の人であったが、一方で土地の投機に積極的であったという。ヴァージニアであるいはテネシーで将来の移民の急増による値上がりを見て込んで未開拓な土地を買い集めていた。しかし、ジャクソン大統領の国立銀行の閉鎖に端を発する1834年の金融恐慌で価値の無い土地と借金を抱えて生活すら立ち行かなくなり、紆余曲折の末に1835年に親族を頼ってミズーリ

州のフロリダという町に移住することになる。後のマーク・トウェインとなるサミュエルはその年にここで生まれる。しかし、落ち着く間もない1837年に、1840年代半ば近くにまで続く不況をもたらす一層甚大な恐慌が再び全国的な規模で発生し、上で述べたように当時から成長が期待されていたハンニバルへの移住を決意する。1838年に正式に町となったばかりのハンニバルに、翌年の1839年クレメンズ家は移り住み、ジョン・マーシャルは弁護士を開業すると共に、懲りることなく借金をしてまで不動産に投資する。弁護士として身を立てることを決して諦めない一方で、倦むことの無い土地投資はジョン・マーシャルの思惑とは違い、クレメンズ家に多額の借金と挙句の果ての破産をもたらすことになる。

このようにジョン・マーシャルを懲りずに不動産投資・投機に駆り立てるのは、上で説明したように、ハンニバルを中心とするミズーリに対する経済成長の期待である。この時期ミズーリ州における土地の購入は、たとえば農民としての人植であっても多めに購入して値上がりを待って売ることが一般的であったとされている。目に見えて成長著しい地域の地価、特に鉄道の敷設の計画や期待があったミズーリ州ではあちこちで、地価の上昇に対する期待や思惑が乱れ飛んでいたはずだ。第二の原罪の源をこの時期のこの地域に求めるのは理に適っている。⁴⁾

しかし物語において1830年を起点とするドーソン・ランディングは「静かで、こぢんまりと、充足した」町として描かれている。描かれる地方に暮らす具体的な個人の日々の生活と、テキストの背後に展開していると想定できる、実際の時代の大きなうねりとの落差がここにはある。

3 1845年に迎える節目

以上のように「まぬけのウィルソン」は、選挙を1853年にすることで、その背後にカンザス・ネブラスカ法を巡る議論とその経済的背景を持ち込み、物語の悲劇の背景を示唆し、同時に1830年を起点とする町の動きを鈍いものにすることで、背景の大きなうねりのこちら側で生きる人々の日常生活の矮小性を強調する。では、1845年は、物語の中でどのように扱われ、そこに何を読むことができるのか。

ドーソン・ランディングの町にとって1845年においては、トムの取り替えられた父パーシー・ドリスコルと、トムの実の父親であるセシル・パーレー・エセックスの葬儀が、最大の出来事だったと思われる (Ch. 4, p. 24)。では、現実の世界で1845年には何が起こっていたのか。

話をトウェインの父ジョン・マーシャルに戻すと、彼のように土地を投機や投資の対象として扱い、都市の社会資本の整備、ビジネス振興に尽力する法律家は、ホイッグ党の支持基盤を形成する典型的な都市中産階級である。彼らは、独立自営農を民主主義の基本的要素としたアンドリュー・ジャクソン大統領の民主党支持者と、19世紀前半のアメリカ政治を二分する勢力であった。しかし開拓農民が人口の大半を占めるミズーリ州において、ジャクソン民主主義を旗印とする民主党が圧倒的な影響力を持っていたことは言うまでもない。そんな中で、ミズーリ州において、1840年代前半、選挙を巡る大論争が巻き起こっていた。

論争のポイントをひとことで言えば、連邦議会選挙においては小選挙区制の問題、州議会選挙においては一票の格差を巡る問題である。ミズーリ州議会は1842年連邦議会の要請を受けて、それまで連邦議会下院議員選挙は、州をひとつの大選挙区として、割り当てられた議席数の数だけの候補者名を連記する投票方式であったものから、州を議席数だけの選挙区に分けて選挙区毎にひとり一票とするように変更する案を審議することになった。同時に、州議会議員選挙について、選挙区に当たるカウンティの数を60から77に増やす一方、代議員の数をこれまでの98から州憲法で定められた上限の100にまで増やす案についても検討した。⁵⁾ 選挙制度を巡るこの二つの問題の背景は、ミズーリ州がその人口のうち広大な地域に散らばり大多数を占める農民層に支持される民主党と、急速に増加しつつもいまだごく少数を占めるに過ぎない都市の選挙民に支持されるホイッグ党の、二大政党体制という政治状況である。⁶⁾

連邦下院議員選挙にあっては、これまでの制度では人口の圧倒的多数を支持層として抱える民主党が大部分の議席を独占してきたのに対して、新制度では選挙区の区割りによっては都市部の票が生きてきてホイッグ党にも議席の獲得・拡大の可能性が出てくる。一方、州議会議員選挙にあっては、州憲法で1カウンティには少なくとも1議席が与えられることとなっており、議席数の上限が100と定められた中でのカウンティの増加は、人口に関係なく1カウンティ1議席に限りなく近づくことになる。しかも新しいカウンティとして加わるのは開拓された農村地域である現実を考えると、都市勢力の議席の比率が相対的に減っていくことは目に見えている。1842年の州議会では、連邦議会からの要請は拒否し、州議会議員選挙については議席数を殆ど変えずにカウンティすなわち選挙区を増やす方向で修正した。伸張著しい都市部の政治的発言力は抑えられ、農村部を支持基盤

とする民主党の州議会での力は一層強固なものとなった。

しかしながら、先にハンニバルの成長を見たように、西部開拓の進展に伴う人口の増加と交通・通信網の整備、各種産業の発展から、ミズーリ州の中にも都市の形成が進んでおり、民主党の中にも都市部を中心にビジネス寄りの考え方が広まり始めていた。1845年の州議会では現下の景気低迷を受けて、こうした党内の分裂を避けたい民主党が党内一致を目指して、1842年には否決した連邦下院議員選挙を小選挙区制で行う選挙制度の改革を、認めることとなった。そもそも小選挙区制こそが、本来民主党の主張する地方自治の原則には馴染むことも、その背景にはあったとされる。

むしろ地方自治の原則を徹底した場合により深刻な問題となるのは、カウンティの数と議席数がほぼ同じになってしまった州議会議員選挙である。1845年の州議会においては、州内の新しい開拓の進展と人口の流入を受けて、カウンティの数を77からさらに19増やして96にまで引き上げることがまず決まった。これに対して、人口に比して議席数を割り当てることを大きく考慮する方向で選挙制度そのものを修正することを求める動きが、ホイッグ党および都市部の民主党から出て、州憲法そのものの改正が議論の俎上に上ることとなった。最終的に議会は議席数を100以上に増やして対応する、都市部に配慮した憲法改正案を可決するが、1846年に実施された州民投票では僅かの差で否決され、州憲法は南北戦争終了後の南部再建まで改正されることはなかった。しかし、こうした動きが出てきて一旦は州議会で憲法改正案を可決しただけでも1845年は、ミズーリ州における都市を代表する勢力が一定の力を獲得していることを如実に示し、時代の変化を示す重要な時であったと言える。

このように、選挙制度改革の動きがこの時期に湧き上がったのは、人口構成の急速な変化によるものであり、ミズーリ州に急速に都市型社会が広がっていることを示すものである。では、この時に、「富の呪い」にとりつかれたトウェインの父ジョン・マーシャルは、どのように立ち回っていたのか。

4 「富の呪い」——もうひとつの原罪

ジョン・マーシャル・クレメン스는、生業としての弁護士業務で成功することは生涯無かったが、社会的な指導者としての評価を獲得することには成功したようだ。ミズーリ州に移住してから通算6年ほど経った1841年には巡回裁判所判事に任命され、1844年には治安判事に選出されている。

しかしジョン・マーシャルの野心は、司法の分野に留まるものではなかった。1844年から45年にかけて、市制施行を視野に入れて設立されたと思われるハンニバルの都市環境改善委員会の委員長に就任し、道路整備、ミズーリ州最初のフリー・メイソンの大学メイソン・カレッジの誘致、図書館の設立などに尽力し、図書館については館長にまで就任している。こうして成長著しいハンニバル社会のリーダーに踊りだす1845年前後はジョン・マーシャルにとって、2年後の病没による頓挫がなければ、都市社会のリーダーとして、社会的・経済的に自己実現に向けて大きく飛躍する時期となる可能性が十分にあった。1853年まで生きながらえて、物語のドーソン・ランディングのようにその年ハンニバルの市制に伴う選挙があったとすれば、市議会議員選挙はおろか市長選にさえ出馬していたかもしれない。都市型社会の広がりとは、ようやくジョン・マーシャルに活躍の場を提供することになった。

さらにわれわれが注目したいのは、この時期に彼がハンニバルのビジネスマンを糾合して、ハンニバル・セント＝ジョセフ鉄道建設を推進する委員会の委員長に就任したことだろう。すでに述べたように、州政府の補助により鉄道を建設することが認可されるのはジョン・マーシャルの死と同じく1847年であった。鉄道建設は計画段階から様々に経済的な期待や思惑を生み出し、土地投機の温床とも言える事業である。ヴァージニア時代以来、一貫して不動産市場に積極的に関わってきたジョン・マーシャルが生きながらえたなら、この機を逃すとは思えない。

しかしそれがうまく行ったかと言えば、ジョン・マーシャルの半生が自らの第二の原罪「富の呪い」の原点として心中深く沈殿しているマーク・トウェインには、それどころか「富の呪い」の淵をまたぞろ覗き込む、すなわち投機と借金を繰り返す泥沼が待っていたに違いないと、思えたのではないか。では「まぬけのウィルソン」の物語にそれはどのように表出しているのだろうか。あるいは逆に、そのような思いがもたらす「まぬけのウィルソン」の悲劇とはどのようなものか。

「まぬけのウィルソン」を読んで悲劇を感じるのは、トム物語だろう。黒人の血がわずか32分の1と微少なために白人と見まごう彼の姿を活かした母親の機転で、主人の跡取り息子と取り替えられて裕福な白人一家の嫡男として育つが、状況の転変と本人の欲望ゆえに育ての父を殺して裁判になり、一旦は殺人罪で終身刑となるが黒人であることが暴露されて、地獄よりもつらいとされる深南部に売られてしまうというものである。ただ、

これは確かに救いようの無い悲劇ではあるが、あくまで人種差別を伴う奴隷制度を巡る悲劇であって、「富の呪い」による悲劇とは言いがたい。

経済的なプロットということで言えば、主人公トムの取り替えられた父親パーシー・ドリスコルにまつわるエピソードは、富に魅せられたために破滅に陥る「富の呪い」による悲劇と呼ぶことができる。パーシーは、物語の始まる1830年2月の時点では投機の才を生かして財をなしているとされていたが(Ch. 1, p. 5)、その秋には投機の成り行きが怪しくなり、対応するために兄のレスター・ドリスコルと共に7週間にわたって奔走している(Ch. 3, p. 18)。パーシーが死亡する1845年の時点では既に不動産ブームは崩壊していて彼はすべてを失っており、遺産相続者のトムに一文も遺すことはなかったとされている(Ch. 4, p. 25)。歴史的にも1837年の金融恐慌に端を発する長期にわたる不況は、不動産価格の暴落と低迷をもたらし、彼のように破綻した投資家、投機家は少なくなかったはずだ。トウエインの父親もその中に含めることができる。パーシーのエピソードにジョン・マーシャルの生涯が投影されている可能性は高い。

物語全体の悲劇をこのエピソードだけで語りきるのには無理があるようにも思えるが、このパーシーの悲劇はもうひとつの悲劇、トムによる殺人をもたらしたという意味で、このエピソードだけで閉じてはいない。トムによる育ての親レスター・ドリスコルの殺害は、直接の事情はともかく、トムのギャンブル癖による浪費が根本的な原因となっている。ギャンブルによる借金、その穴埋めのための母親の「売却」、その彼女を買い戻すためのカネの工面。こうした自転車操業をしのぐためのカネを調達するべく、養父レスターの家に侵入し、見つかって殺してしまうのである。彼の破滅の原因、ギャンブル癖はどのようにして形成されたのだろうか。

トムはギャンブルを19歳でエール大学に送られた際に覚えたらしく、東部で「ギャンブル癖」と「東部風の洗練」(Ch. 5, p. 26)を身につけて帰郷したとされ、その後はミズーリ州随一の大都会セント・ルイスにギャンブル通いを繰り返すことになる。しかし彼の幼い頃の、投機に明け暮れた挙句に失敗して破滅するパーシーの下で育てられた環境を考えると、それまでに素質は育まれていたとするのが自然ではないか。殺人まで犯してしまうトムによるカネへの執着とカネのもたらし刺激への強い欲望は、投機癖の父に培われた素質に東部の都会の遊蕩が火をつけたものだ。このように、トムが育ての親の殺害に手を染めてしまうという物語全体の悲劇は、当時の経済状況に根ざしたパーシーとトムの親子の、「富の呪い」の物語

である。

この悲劇が初めて顕在化するパーシーの死が1845年。この時、現実の世界では、最終的に住民投票では僅差で否決されるものの、人口の集中する都市の発言権を高めるために選挙制度を改正する憲法修正案がミズーリ州議会で通過する年である。ミズーリ社会の都市化への足音が確実に聞こえ始めている。そしてこの年、農本主義的民主主義の領袖であり、ミズーリ州では圧倒的な人気を博したアンドリュー・ジャクソン元大統領が逝去した。物語において、パーシー・ドリスコル、セシル・バーレー・エセックスの死、すなわち南部から西部に移植したヴァージニア以来の名家の当主の相次ぐ死を1845年に設定したのには、作者が1845年を何かの終わり（の少なくとも「始まり」）であることを示そうとしている意図が透けて見える。そして8年後の1853年、現実の世界では、一見したところ南部の勝利であるかのようなカンザス・ネブラスカ法の提案にも、東部ビジネスの触手のような大陸横断鉄道建設の思惑がミズーリ州にまでおよび、南部から受け継がれてきた農本主義的な社会が早くも変質しようとしていることが見てとれる。そんな中物語では、ヴァージニアの名家にしてこの町の最有力者ヨーク・レスター・ドリスコルが、あろうことか甥と取り替えられた黒人奴隷の手にかかって死ぬことで、この物語の悲劇は完成することになっている。資本主義的・都市社会的「富の呪い」の悲劇がここにはある。

5 なぜ二つの物語が必要なのか

以上、「まぬけのウィルソン」に明示された1830年、1845年、1853年という時代設定が、物語の背後にどのような時代の風景を立ち上げらせ、今度は逆にその19世紀半ばのミズーリの風景が物語にどのような意味を付与してくるのかを見てきた。そこには急速な都市化が進むミズーリの社会、とりわけ交通の要衝として急成長するミシシッピ河畔の町の姿が見えてくる。物語の舞台ドーソン・ランディングの社会は「静かで、こぢんまりと、充足した」と形容されるものの、それはあくまで地元土地の有力者として根を降ろしたドリスコル一族を中心とするコミュニティの中で共有される共通意識のことであって、1853年選挙はその背後に急速な都市化が広がっていることを想起させる。ドリスコル一族のコミュニティにパーシーとトム親子を経由して都市化の波が「富の呪い」として入り込み、浸食して悲劇をもたらす構成となっているのである。ジョン・マーシャルに遡るトウェインの経済的な原罪意識が、ここに表出されている。

このように見ると、この作品に「かの異形の双生児」の付け加わっていることが疑問に思えてくる。「まぬけのウィルソン」だけで完結した物語として、トウェインが1890年前後に苦しむ「富の呪い」の源流を辿ることは可能ではないのか。「かの異形の双生児」に展開される、人を選ぶということを巡る選挙の本質的な問題は、時代設定を明確にして具体的な選挙を想定した「まぬけのウィルソン」とは異質なのではないか。

確かに「まぬけのウィルソン」において、「かの異形の双生児」のような候補者についての根本的なアイデンティティの問題は問われていない。しかしながら、物語の中で指定された時を手がかりに、これまで見てきたように物語の舞台となった地域の急激な変化の中で浮上したのは、選挙制度改革の議論であり、一票の格差や当選者の代表する地域といった、選挙にまつわるアイデンティティの問題である。それにしても、そうであるならなぜ「かの異形の双生児」のエピソードを「まぬけのウィルソン」に盛り込んで、その問題を前面に出さなかったのか。ぜて背景に退かせたところに、どのような意図を読むことができるのか。

選挙とは別に、アイデンティティの問題は、物語の主要なテーマとなっている。何よりもまず、「まぬけのウィルソン」の物語の中心を貫くプロットは、黒人奴隷の女性が自分の子供を同じ日に生まれた主人の子どもと取り替えたものの発覚し、自分の子どもは黒人奴隷にとって地獄とも言うべき深南部に売り飛ばされてしまう、というものである。子どものアイデンティティを取り替えることで、自分の子どもが深南部に売られることを防ごうとして一旦は成功するが、結局アイデンティティを見破られてしまっ、て、恐れていたように息子は深南部に売られてしまう。アイデンティティはこのエピソードのキー・ワードである。さらに、人の性格がどのように形成されるかについて、繰り返し触れられる。黒人に生まれながらも白人として育てられるとどのような性格になるのか。白人に生まれたにもかかわらず、黒人奴隷として育てられることで、どのような人物が育つのか。性格を作るのは血か環境か。物語は必ずしも一様の答えを示さずに、そのことについての人々の気持ちの揺れが描かれる。また、「黒人」の定義についても物語は問題にしている。黒人奴隷のロクサーナの容貌は黒人のようには見えず、ましてやその息子は、白人である主人の息子と取り換えられても誰も気づかないのであるから、姿かたちは白人そのものだ。彼らが完全にアフリカの人たちを祖先にするのではなくて、血の何分の1かがそうであるに過ぎないにもかかわらず、そのため姿は白人であるにもかかわ

らず、社会は彼らを黒人と分類する。本人の中に二つの血が存在し、白人の血を無視して黒人の血の存在でアイデンティティを決めるのである。さらにこのように内部の血や性格がどうであるかに関わらず、指紋はそれぞれ独自のものを持っており、それによって取り換えられた子どもと物語の中で発生した事件の犯人のアイデンティティを明らかにすることが、物語の大団円をもたらすことになっている。

このように、物語の背景に広がる時代の中に選挙にまつわるアイデンティティの問題が当時の大きなテーマであることは、少なくとも当時の読者なら気付いたものと思われるが、あえてそのことを前面に出さなかったのはどうしてだろうか。それは、選挙に表出する社会の急激な変化に伴うアイデンティティの揺らぎが、選挙に集約できない社会構造的で遍在する問題であることを示そうとしたのではないだろうか。しかし一方で、選挙自体にも深刻なアイデンティティの問題が顕在化していること——このことを示すために、「かの異型の双生児」を後ろに付け加えた上で、「まぬけのウィルソン」の物語にも、そのもう一つの物語につながる仕掛けが用意されている。

「まぬけのウィルソン」の物語の冒頭、主要な登場人物であるウィルソンは、激しく吠える犬の声にうんざりして「犬の半分が自分のものだったら……自分の分を殺したい」(Ch. 1, p. 6)と言ったところ、町の人々に「まぬけ」の称号を与えられることになる。これが物語および作品全体のタイトルで、「まぬけ」が登場人物の名前に冠せられる経緯である。人と犬との違いがあるとは言うものの、生きた個体が好ましい面と好ましくない面の両方を持ち合わせている時、半分を殺してしまうという発想は、「かの異形の双生児」においても「まぬけのウィルソン」においても、同一と言って差し支えあるまい。「まぬけのウィルソン」はこのようにして、「かの異形の双生児」において物語の核を成す、選挙についての問題提起と強く結びついているのである。

おわりに

選挙戦の争点にせよ選挙制度そのものにせよ、選挙は時代が作るものであり時代を写す鏡である。「まぬけのウィルソン」に登場する選挙の背後には、時を特定した時代設定により、経済・社会がうねりを伴って激変していた19世紀半ばのミズーリ州の状況が透けて見える。そんな中でひとりひとりの具体的な個人は、一見したところ時代とはかけ離れて平穏な日常

生活を送り、一見したところ社会のテーマとはかけ離れた私的なスキャンダルに振り回されているものだ。トウエインは生きた個人の日常の営為を、大義や歴史や国家とは切断された矮小なものとして、時代の激動や歴史の奔流とはかけ離れた、「静かで、こぢんまりと、充足した」世界として物語化する。同時に、そのように一見したところ閉じた矮小な世界が時代に開いていることを「まぬけのウィルソン」の物語に選挙の具体的な年を設定することで示し、人間の本質の問題に関わっていることを「かの異形の双生児」において選挙を巡る本質的な問いかけをすることで示している。

19世紀から20世紀への世紀転換期に向かって拡大、発展を加速するアメリカ資本主義の熱狂に翻弄される中、マーク・トウエイは翻弄されることを自ら求める心の闇を、このように文学テキストを構築することを通じて、探ろうとしているのではないだろうか。

註

- 1) 選挙をテーマにこの作品を論じたものとしては、Cowan の “By Right of the White Election” が「人を選ぶ」というより広い観点から論じている。本論の最後に指摘するように『まぬけのウィルソン』にはアイデンティティ一般をテーマとする要素があり、それを「人を選ぶ」という角度から論じて、宗教的な修辞が世俗的な論理にも入り込んでいることを明らかにしている。
- 2) 以下、ミズーリ州の歴史については、McCandless, Nagel の知見によるところが大きい。ハンニバルの歴史については以上のミズーリ関係の書籍に加えて、ウェブ・サイト “Hannibal, MO - Historic & Literary Resources,” “History of Hannibal” を参照した。また、19世紀のアメリカの地方自治制度については、小滝に大きく依拠している。）
- 3) 州昇格以来ミズーリ政治を支配してきたアンドリュー・ジャクソンの流れを汲む民主党勢力は、本来公的機関による経済的な介入を嫌い、州の支援を受けた鉄道建設に本来積極的ではなかった。しかし、1840年代半ば以降の景気回復と後に述べるようなビジネス・マインドを持つ都市型の州民が増える中で、民主党の中にも建設に積極的な勢力が増えたとされる。(McCandless 145)
- 4) ここで、ミズーリ州と不動産投機との関係を確認しておこう。当時のミズーリ州の金持階級の多くはルイジアナ購入依然の早い時期にこの地域にやってきて広大な土地を安価な値段で獲得し、後から入植する農民に高く売りつけるという不動産投機でその財を築いたとされており、都市を形成する者の中心を成すのはこのようにして古くから根を下ろした者である。この後も未開拓の地を安く購入して入植者に高く売る土地投機で富裕層の仲間入りをするケースが少なくなく、州内各都市の有力者に土地投機に手を染めるものは少なくなかった。ミズーリの初期の都市文化は、ある意味では投機家が形成していると言える。ちなみに、実需を越えた不動産売買が盛んであること、州の昇格後にもともといたスペイン人による土地権利主張の告訴が頻発したことなどから、不動産関連の需要を当て込んだ弁護士が東部から大量に移入し、都市文化の一角を成したこともミズーリ州の特徴

とされている。トウェインの父も入植後に弁護士を生業としようとしていたし、『まぬけのウィルソン』のデイヴィッド・ウィルソンが弁護士として東部から移り住み事務所の看板に「土地測量」のひとことを付け加えている (Ch2. P. 7) のには、こうした事情が背景としてある。(詳しくは McCandless を参照)

- 5) 選挙区に当たるカウンティは1851年時点で、ミズーリ河の北側ではひとつを残して、南側では8つを残して現在と同じものが既に存在し、1860年には全体でひとつを残して現在の114すべてが出来上がっていたとされる。州内の開拓が1840年代までにおおむね終了していて選挙区の増加に限界のあることは、既に目に見えていたのである。(McCandless 36-37)
- 6) 2,500人以上を都市地域とした場合、そうした地域は州内に12箇所あり、そこに住む人口は1850年の時点で州全体の12パーセント以下、1860年で17パーセントあまりを占めるに過ぎなく、後者の時点でなお、その半分以上をセント・ルイスが占めていた (セント・ルイス7.8万人、その他4.5万人)。(McCandless 135)

引用文献

- Cowen, Michael. "By Right of the White Election: Political Theology and Theological Politics in *Pudd'nhead Wilson*." *Mark Twain's Pudd'nhead Wilson: Race, Conflict, and Culture*. Eds. Susan Gillman and Forrest G. Robinson. Durham, NC: Duke U. P., 1990. 155-76.
- Emerson, Everett. *Mark Twain: A Literary Life*. Philadelphia: U of Pennsylvania P., 2000.
- "Hannibal, MO — Historic & Literary Resources" *Hannibal, Missouri — America's Hometown*. G3 Business Innovations, 1995-2013. n.d.
<www.hanmo.com/history.html>)
- "History of Hannibal" *City of Hannibal*. City of Hannibal, MO. n.d.
<<http://www.hannibal-mo.gov/>>
- McCandless, Perry. *A History of Missouri (Volume II): 1820 to 1860*. Columbia, MO: U. of Missouri P., 2000.
- Nagel, Paul C. *Missouri: A Bicentennial History*. New York: Norton, 1977.
- 小滝敏之『米国自治史論 II——建国期アメリカ地方自治の歴史と思想』公人社 2012。
- Powers, Ron. *Mark Twain: A Life*. New York: Free Press, 2005.
- Twain, Mark. *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*. Ed. Sidney E. Berger. Norton Critical Edition, 2nd ed. New York: Norton, 2005.

アメリカ研究 48 *The American Review* 48

2014年3月20日 印刷

2014年3月25日 発行

ア メ リ カ 学 会

〒231-0023

横浜市中区山下町194-502
学協会サポートセンター内

発行人 古 矢 旬

編集人 庄 司 啓 一

印刷所 啓文堂松本印刷

Edited, published, and distributed by the
Japanese Association for American Studies
c/o Gakkyokai Support Center,
194-502 Yamashitacho,
Naka-ku, Yokohama
231-0023, Japan

Cover photo: *Photograph of President Barack Obama's
First Inaugural Ceremony in 2009.*

March 2014